

## 翻 訳

### 錢鐘書著『写在人生辺上の辺上』

### 「交友について」 および 「悪口——著作について」

張 新 力 (訳)

#### [解題]

『人生の余白に書き込む』（『写在人生辺上』）の日本語訳を発表した際（愛知大学語学教育研究室『言語と文化』第23号，2010年7月発行），錢鐘書の生涯と業績を紹介しました。

今回は，錢鐘書文集『人生の余白の縁に書き込む』（『写在人生辺上の辺上』）から「交友について」（談交友）と「悪口——著作について」（「雑言——関于著作的」）を日本語に訳しました。

「交友について」は氏が1937年イギリス留学中に書いたエッセイで，友人の類型についての観察，そして，儒教的交友法への批判は，今読んでも共感することができます。

「悪口——著作について」は1948年に発表されたもので，作者は自分の著作に対する賛美を喜んで受け入れることの危険性を指摘しています。

キーワード：錢鐘書，交友，面子，博識，雑言

#### 交友について

人生にとって恋愛は欠かせないものだが，友情は奢侈品でしかない。だから，神様は孤独なアダムの不憫に思い，イブを与えたのだ。しかし，イブ以外の人を与えなかった。人々はしばしば恋愛を火焰に譬えるが，この譬えは意外に適切だと思う。恋愛は火と同じぐらい食欲で，同じくらい蔓延しやすく，同じくらい残酷なものである。強固な素材も焼き尽くし，光と情熱を出すために，自ら灰燼と化す。パイロンもゲートもミュッセも野火のように人の一生をかすめとり，白色の，栗色の，褐色の愛人たちの，血を垂らしている赤い心臓，白い心臓，黄色い心臓を焼き尽くしてしまった。それらは燃料の供給源に過ぎなかった。愛人は新しいほど楽しいが，友人は古いほど良い。時間の友情に対する磨食は，まるで川の流れるが石の回りを流れて，石をきれいに洗い，ぴかぴかに光らせるのと同じようなものだ。友情は

欠かせない必需品ではないから、嫌気がさすこともなければ、飽き足りることも少ない。友情は、コース料理の最後の一品を食べ終え、ナイフとフォークを置き、椅子に身を寄りかからせ、ウェーターがコーヒーを持ってくるのを待っているときと同じ感じである。もちろん一概には言えず、すべてが友人の種類によって決められる。

「緊急時と困窮時の友が本当の友」という西洋の諺があるが、それはちょっと浅はかだと思ふ。本当のところは緊急時に友人はいらない。友人には金があり、自分がちょうど彼の金を必要としている。友人には米があり、自分にはちょうど米が欠けている。その時、われわれは本当の友人が必要かもしれないが、本当に必要なのは友人ではなく、友情と面子を利用して、友人の持っているものを借りようとしているだけである。友情を道具とする方法は一番便利である。情趣が豊かな友人であっても、自分が困窮した時はその友人の面白さ、考え、風韻を楽しむ余裕がなくなる。文なしのまま、飢えと渴きを我慢して、友人の閑談を聞く人がいるだろうか、孤高な名士でもそこまではできないだろう。これは劉孝標のいわゆる「権勢の友、利益の友」とは全く別の次元の話である。気前が良いかどうか、吝嗇かどうか、困った時に助けてくれるかどうかは友人のことである。友人だから助けてくれるのは当たり前だとの考えは一方的な思い込みである。そういう人は、友人に誼を重んじてもらい、金銭的な援助を期待していて、友人だからものを共有すべきだと主張し、困窮で貸してもらいたい時、下心を持って友情ばかりを語る。友人に助けてもらえなかったため、隔たりが生じたことがたくさんある。逆に、普段見くびっていて付き合いたくない人であっても、この時、急場を救ってくれたら、旧友よりも親しみを感じ、感激のあまり即親友になり、旧友との長年の誼を新しい友に移してしまう場合もある。困窮時の友情は一文の価値もないと言いたいが、実は、この時こそ友情の価値が金銭で測れるものになっている。『広絶交論』以後の詩文は友に対する望みが高すぎて、評価も酷薄すぎると思う。自分の貧しさと心の狭さを顧みずに、友人を度量の狭い人と責めたりしている。金銭ばかりに目を向け、貸したくても持っていない、あるいは、持っていて貸してくれない人を友としないのだ。ゴールドスミス (Goldsmith) の書いた東方物語『アセムの悲劇』はあまり知られていない。1877年に出版された単行本の序文には友情測量表があり、友人が貸してくれたお金の金額を基準に友情の深さを測る、と書いてある。恩恵を被るための、金銭をごまかすための交友観が至る所に存在している。孤高な張舟山もその交友観に悩まされ、「世俗的な行為を容認しても相変わらず傲慢と言われ、権勢と利益を求めためなら友もだんだん疎遠になる」(事能容俗猶嫌傲、交為通財漸不親)と嘆いた。『広絶交論』はわれわれに代わって、権勢と利益ばかりを重視する人を非難したが、われわれには『反絶交論』も必要である。それによって、その友人たちの友人、すなわち、権勢と利益ばかりを重視する我々自身をも非難すべきである。『水滸伝』において、宋江が罪人となり、額に入れ墨を入れられ遠方に追放されたとき、戴宗が彼

に付け届けを要求した。宋江が「それは人が自らあげたいと思わないとありがたみがない」と言った。もっともな言葉だと思う。劉孝標や張船山より何万倍も優れている。しかし、この名言を最初に言ったのは「友情より金を愛する」船火児（訳者注：『水滸伝』の中の人物——張横のニックネーム）の張横という匪賊の親方だった。匪賊は上流階級の読書人よりも道理に明るいということに、感慨にひたらずにはいられない。しかし、彼は道理を知りながら強盗を働いている。言行不一致こそ匪賊なのだ。

物質的な援助のほかに精神的な補助について言えば、孔子の謂う正直で博識な友が思い出される。これも漂白された功利主義である。それは自分の品行と見識を高めてくれる人と友になろうと唱えている。私の偏見かもしれないが、こういう友情が必ずしも強固になれるとは思わない。孔子の謂う直諒博識な益友は面従腹背、巧言令色の悪友とは正反対な存在で、彼らは人の過ちを率直に戒め、善を勧める、年が若いのに老成しているように見える。このような人を至る所に見かけることができる。自分は生まれつき好戦的で、短気で、自分の短所を知られたくなく、不必要な悩みを避けるために、そういうお節介な善人とできるだけ距離を置き敬遠している。避けられずに会ってしまう場合、お説教を聞くしかない。自慢じゃないが、近ごろ寛容になってきた私は、子路が過ちを指摘されると嬉しく思うような境地に達している。正直で誠実な友人のお説教を聞くとき、良心でものを考えてはいけないうし、嫌な顔をしてはいけないう。彼はあなたの恐れ慄く表情を見ると、もう過ちを認めたとはい、いっそう強い気迫で押ししてくる。叱りや説教を繰り返して、聞く側が弁解できないほど捲し立てた後、優しい口調に変わり、あなたの肩を軽く叩いて行ってしまう。離れた後も、天の代わりに道義の責任を果たし、計り知れない功績を積んだと満足に思い、満面の笑みになる。逆に、あなたはその人の言うことを全然気にせず、へらへらと笑って対応したら、どうなるだろう。例えば、その人が、あなたは罵言したと指摘し、あなたは罵言だけでは気が済まず、殺したかったのだ、あなたは辛辣で毒々しい言葉を使ったのだと言ひ、あなたがその通りだ、毒を入れたいぐらいだといちいち反論したら、その人の顔はきつとアイロンをかけられたように長くなり、泣くに泣けず笑いに笑えない表情になるだろう。およそ、お説教が好きで、齒に衣着せぬと自負する人は、近年私が出会ったキリスト教の信者のように、もっとも他人の意見を聞き入れない。だから、正直で誠実な人間同士の間ひ友情が生まれたことはめったにない。率直は幾何学のように、平行してひて、永遠に交わることがない。率直にものを言うとは、わがままに罵言を吐くことだと私は思ひ。しかし、正直で誠実な「益友」は絶対に罵言をしないし、罵言することも忌み嫌うのである。彼らは彼らが思ひあなたの過ちを見つげると、それを痛快に叱るのではなく、くどくどとお説教をするのである。それを自分の寛大で包容力ある行為だと思ひ込んでいる。罵り合うことは相手に言い返す機会を与えるから、平等な競争の一種だと思ひ。説教はそれと違ひ、やり方は卑怯なものである。彼

らは人が抵抗できないようにまず罪名を被せ、それからやりたい放題に叩き、窮地に陥った人をさらに陥れようとするぐらい情がない。説教の好きな人は人の過ちも好きで、まるで医者<sup>1</sup>が医術を施したくて、人が病気にかかるのを望んでいるのと同じようである。人間は陰湿な下心を持っているから、キリスト教は信者に天国を設けた。考えてごらん、非の打ち所がない環境で、完璧な人たちに囲まれ、正直で誠実な「益友」は、説教できる相手を見つけることができず、暇すぎて心が虫に刺されたように痒く、舌も錆が出るほど苦痛と感じているに違いない。天国に入ることはそういう人にとってこの上なく酷い仕打ちだと思ふ。A. E. テーラーが『モラリストの信頼』(Faith of a Moralist) に次のようなことを書いている。氏はダンテの『神曲・天国篇』を読み、天国は重苦しい雰囲気<sup>2</sup>で、そこにいる聖人たちは下界から誰かがおしゃべりに来ないかと望んでいる印象を受けた。私も常に疑念を持っている。天国が楽しいところならば、ダンテがそこにいった後、田舎者が都会に来たようにあちこち見るはずなのに、彼は不安で気が動転し、ベアトリーチェの美しい目ばかりを見つめた。「さあ、カッチャグイダの方に向いて、よく聞きなさい。天国は、私の目の中だけにあるではありません」とベアトリーチェに婉曲に叱られるぐらいだった。天国はスウィンバーン (Swinburne) の言ったようなセクシーな娘がたくさん住んでいるバラ園ではない。セクシーな娘が裸足で踊りながら、「天国は私のものじゃない」と歌っている。スウィンバーンはその詳細を知っているからこそ、一生反逆していたのだろう。中世フランスの伝奇小説『オーカサンとニコレット』によれば、天国は年寄りの僧侶と障碍者の乞食ばかりで、風流な騎士は地獄を落ち着き先としている。ルナンの『些細な伝奇』(Feuilles détachées) の序文にも、天国にいる人の大半は敬虔な老女で、退屈な場所であると書いてある。ルナンは宣教師だから、彼の言うことは信用できるだろう。愛する女の犬まで愛するのと同じように、本当に友人になりたいならば、その人の欠点を気にしないはずだ。人類に全責任を負う神様ですらねつ造、つまり、泥で創作することしかできず、世の中の悪人を善人に改めることができなかったのに、浮世の凡人が知人の品行を変えようとするのは可笑しいじゃないか。欠点は飾らない天真、無くすことのできない個性、抑えきれない衝動であって、人の作った規律から逸脱したもの、自然の一部分に帰すべきものである。欠点だけを取り出して見ると憎たらしいが、それを友人と一緒に見ると、その欠点が彼の性格と調和していると感じ、それを憐れむ気持ちになる。まるでかすかにひび割れが見える古い陶磁器のような、一頁が欠けている珍しい古書のようなもので、一層大切にしていあげようと思わせる。もし美しい異性の友人の口から、裂帛の気合いで、研いだ包丁で野菜を切るようなさっぱりしたお説教なら快く受け入れる。しかし、私の知っている限り、中国に限らず、外国でも、美しい女性はものをストレートに言わない。率直にものを言うのはいつも寸胴なおばさんたちである。幸い、私はこういう率直な「益友」を持っていないし、必要とも思わない。友がい

なくて気楽でいいというホイッスラー (Whistler) の名言は、私の考えにぴったりだ。

博識の「益友」も当てにはならない。博識で覚えのいい人に顧問になってもらってもいいが、学問以外に魅力がなければ、友にはなれない。ド・ブロス (de Brosse) はヴォルテールを次のように評価している。彼は詩が素晴らしいから、人々に敬愛されている。確かに彼の詩は悪くない。だから、彼の詩だけを愛すれば良い。彼という人間まで愛する必要はないという含みがある。去年、私が聞いた言葉はもっと痛快だった。ある知人男性に、彼の意中の女との仲を取り持ってほしいと頼まれた。生まれて初めて媒酌人を務めるので、やる気満々でその女性に会いに行った。会うなり、目的を申し上げ、それから、男性の学問がいかに優秀かを真っ先に説明した。第二、第三をいかに合理的に説明しようか考えているとき、女性は「学問が良ければ結婚してあげられるというなら、大学の年配の教授にやもの鰥夫がたくさんいるよ」と冷やかされた。次の例も博識の「益友」に適している。例えば、参考書は内容が豊富で役に立っている。けれども、それを読み物とする人は極めて少ない。アンドレ・ジードは『日記』の中で面白いテストをした。つまり、本に関しては、これらの本はどんな人に読んでもらおうとしているのか、そして、人に関しては、この人達がどんな本を読もうとしているのかを問うた。それに照らし合わせて見たら、博識の「益友」とは参考書ばかりを読む人を指している。博識の人はしばしば参考書と同じ運命を辿る。利用された後はまるで絞られたレモンのように無味乾燥になり捨てても構わないものとされる。はっきり言えば、世の中の人々はみんな得意なものを持ち、それぞれの分野においてたくさんの知識を持っている。それらの人を全部友にしようとしたら、付き合えるか？ ロンドン東の街角にガイドを進んで引き受けようとしている腕白小僧、夜半のパリのクラブを案内するチンピラは闇社会のことを誰よりも詳しく知っている。多聞であれば友にするという基準に照らして交友したら、持っている小遣いはその人たちへのチップにも足りない。多聞の「多」は数量を重視している。しかし、暗記は学問とは比べものにならない。学問は学者の性格や情感と一体になっている。数が多いだけではなく、特別な性質を持っている。学者が学問の微細なところまで心血を注いで培養し、神経と脈絡が付いたようなものに仕上げる。それは真似したくてもできることではない。逆に、参考書のような多聞な人の知識はどんなに広くても、それを完全に吸収しようとすればできる。学校の一般教員は授業中にいっぱい吸い取られ、授業が終わると知的な蓄積は一枚の紙ぐらいの薄さになっている。普通の教員と学生の間で友情が生まれてこないのはここに原因がある。多聞の原則に基づいて生まれた友情は暗記量の増減により伸縮するから、安定性が欠けると推測できる。科学の発展に伴い、「多聞」も新しい段階に入っている。唐の李渤が帰宗禅士に「芥子はいかにして須彌山を納められるか」(芥子何能容須彌山)と尋ねた。禅士は「学者が万券の書を胸に納めている。胸は椰子ぐらいの大きさに過ぎない、万券の書を納められるのか？」と答えた。王荊公の『奇蔡天啓詩』、

袁随園の『秋夜雜詩』にも似たような話があると記憶している。今になって、状況が変わり、上手な学者は暗記せず、<sup>ひきだし</sup>抽斗数個、白いカード数百枚を用意し、分類して索引を作っておけば、もう丸暗記する必要がない。抽斗にいっぱい詰めておけば、心が空しくてもかまわない。抽斗は脳の代わりに働き、時間が経つにつれて、脳も抽斗の材質と化し、ポーとしてくる。近い将来、木材や木、林等からの批評も学者達に尊敬され、「樸学」（訳者注：漢学、または考証学とも言う）という言葉には新たな意味合いが付与されるだろう。

別に友は無益と言っているのではない。心と体に利益を与えてくれる人は必ずしも友人ではないと言いたかっただけだ。友人の良さは数量で計算してはいけない。友情の形成は双方が意識的に近づこうとするのではなく、偶然知らず知らずのうちに、脳裏に友情の種が潜在し、心の中で芽生え、暖かい春の夜に突然現れてきて、あっ、この人だ！ 真の友情は心身に浸透する愉快さに過ぎない。こういう愉快さがなければ、どんなに素直でも、どんなに博識でも、友情は生まれてこない。このような愉快さを感じ取ることができれば、お説教のような導きがなくても、生まれつきの貪欲も残酷も自然に消えてしまう。真冬の深夜に暖炉越しにビュービューする風の音を聞いたことがあるだろう。その風は人の心の憂鬱を袂り出し、きれいに吹き飛ばそうとする。そして、言葉も文字の痕跡もなく、金科玉条の影もない。読み飽きない黄山谷の「茶詞」は「（訳者注：一人でお茶をする時）遠望から来た旧友が燈の下に座っているようで、表現できない喜びは自分でしか分からない」（恰如燈下故人，萬里歸來對影，口不能言，心下快活自省）と友情を絶妙に表現している。交友を飲茶に喩えるのは最適だと思う。中国茶ではなく、イギリスのアフタヌーン・ティーのようで、苦みのあるインド紅茶に角砂糖と牛乳、それにパンやケーキ、場合によってはソーセージもある。乾燥させたものや新鮮なもの、法事をするぐらいのにぎやかさで、満腹になるまで食べ続ける。私の知っている数少ない言語の中で中国語の「素交」ほど友情の神髄を表現できる言葉はない。「素」という字は友情の純潔で素朴な本質を極めている。素はすべての色の元であり、太陽に七色が含まれているように、素はすべての色と調和している。本当の友情はあっさりしているように見えるが、生死を超える厚みがある。もし、それがあっさりしたものではなく、濃厚なら、それは恋愛か、プラトンの言う友情になる。古代中国では夫婦のことを「膩友」と言うが、思いやりの意味合いが入っている。外国語にない表現である。ゆえに、真の友情は精神的な援助や物質的な援助より奥が深い関係である。教皇がボリングブルックを「哲人、導師、朋友」と呼んだのも玩味に値する。大学時代、私にはもっとも敬愛する先生が五人いて、いずれも教皇の言うような哲人と導師から友人になり、そのほかに三、四人の友達がいて、どちらも私に恩徳をもたらしてくれた。しかし、私と彼らとの友情は恩恵によるものではなく、言い表せない親しみによるものである。モンテーニュがラ・ボエティーとの友情を説明したときの言葉を借りれば、「彼は彼で、私は私だったからである」、これほど良い

解釈はない。素交の「素」はこの原色の友情を体得している。「口で言い表せない」快活は文字でも表現できないから、いっそうのこと、文字のない天書にその説明を任せよう。

私はもともと友人が少ない。この三年間、友人たちと一緒にいる機会も少なくなり、手紙に頼るしかない。欧州に着いてから、二、三の外国青年と少し付き合いはあるが、このような付き合いは友人とは言えない。中国に戻ったら、海に隔たれてすぐに忘れるだろう。民族の敷居は簡単に乗り越えられるものではない。外国での友情や恋愛を故郷に持ち帰りたいか？ 距離が遠すぎてこんなにたくさんの荷物は持てないし、税関が厳しすぎて、そうたくさんの関税は払えない。英国の冬は一月か二月に入ってからやっと訪れる。去年の枯れ葉はサラサラと風に散り、書齋の窓を叩いている。百年前のトーマス・ムーアもこのような季節に「友人は冬の落ち葉のように少なくなっていく」(When I remember all the friends so link'd together, I've seen around me fall like leaves in wintry weather) と寂しさを感じただろう。秋冬の殺風景な景色に敏感な中国の詩人の盧照隣も高蟾も瀋欽圻も陳嘉淑も同じような気持ちを表す名句を残していた。金冬心の「旧友は中庭の木の如く、秋風とともにまぼらになる」(故友笑比庭中樹，一日秋風一日疏)は冬夜の寂しさをいっそう深く感じさせた。もう古人の代わりに感傷している場合ではない。私の友人はみんな元気だし、シベリアを経由してくる中国の郵便物は後二日でここオックスフォードに届く。友人の便りもその郵便物と一緒に来るに違いない。

民国26 (1937) 年1月30日

## 悪口——著作について

多くの作者は自分の作品が人に誹謗されても、無視することができる。そして、相手は自分の作品の意図を誤解し、全然理解していないと自分に言い聞かせる。だが、人に賛美されると、喜んで自分の真価を分かってくれているとみなす。しかし、多くの場合、賛美は誹謗と同じくらい盲目的で、作者への心理的な影響が更に悪い。というのは、賛美は一種の賄賂で、賄賂はただでもらうわけにはいかないからだ。人の賛美を受け続けるために、これらの的確ではないが、聞いて心地良い賛美を博するために、知らず知らずのうちに妥協し迎合するようになり、自分の考えと創作の自主権を損なうことになる。自尊心のある人は、予想外の賛美と完璧を求める誹謗とを同じように気に留めるべきではない。ただし、虚栄心はいつも自尊心に勝つ。

スピノザ (Spinoza) の哲学は「意識」と「物質」をはっきり区別している。彼は「物質」を「面積と体積があり、思想はない」と定義している。多くの書物はこの定義の正しさをすでに証明していた。

「まず、論文で指導教官を騙す、それから、講義で学生を騙す」これはある小説で読んだ教授のイメージである。かつての同級生や今の同僚がこの冗談を真に受けて、次々と非難している。中には「あなたたち文学者はそうかもしれないが、われわれ歴史学、考古学、社会学、経済学を勉強している人間は正真正銘の学問をやっている、相手は年寄りであろうが、少年であろうが、絶対欺くようなことはしない」とまで言う人もいた。私もその言葉は言い過ぎで、修正すべきだと思う。「まず、図書館の参考書を自分の著作に取り入れ、それから、自分の著作を図書館の参考書に入れる」と学術の輪廻を描写したほうが適切かもしれない。

どんな有名な作家でもすべての作品を良い作品に仕上げるとは限らない。優劣があり、不揃いもある。これは当たり前のことだが、人々はこの当たり前を忘れがちである。その作品に感銘したから、作品の著者まで好きになる。これも人情の常である。それに、いざ著者のことが好きになると、著者を庇うようになり、彼のすべての作品を聖典ないし法典とみなし、催眠術をかけられたように判断力を喪失してしまい、他人の選択権まで奪ってしまう。シェークスピア崇拜 (bardolatry) もその一例である。これは「専門家」の職業病とも言える。まるで画家の腹痛や女中の膝痛のようなものである。ある作家のある時期の作品を研究する人はしばしば是と非を区別せずに著者を溺愛する。専門家には終始変わらない貞操があり、頑固なほど忠実である。ピスマルクの言う崇拜と傾倒の筋肉が特別に発達している人間である。しかし、彼らは決して文芸を鑑賞していない。まるでサロンのマダムが芸術より芸術家を愛し、演劇のスターを追っかけている人が必ずしも演劇という芸術に興味を持っていないように。

「文は人の如し」という諺は当てにならない。多くの人は文章を書く時、とりわけ政治論文、または学術論文を書く時、学術用語で飾り立て、表面をとりつくろって学術的な姿勢を演出し、美しさをひけらかす。これこそ「文章」だと彼らは思い込んでいる。そうであるなら、「文は女の如し」と言ったほうがもっと適切だと思う。ただ、女にはくれぐれもこのような文章にならないよう、切に祈る。

週刊『観察』第4巻第2期

1948年3月6日